

石仏調査ニュース

ちがさきの石仏

第 20 号

発行

茅ヶ崎市教育委員会
茅ヶ崎市文化資料館

編集協力

文化資料館と活動する会
(民俗行事部会)

連絡先

〒253-0055

茅ヶ崎市中海岸 2-2-18

TEL:0467-85-1733

e-mail:shiryoukan@city.
chigasaki.kanagawa.jp

善性寺(松尾)の

出羽三山供養塔 雑考

加藤幹雄

松尾にある真言宗善性寺の創建は寛永十九年(1642)、鶴嶺八幡社の社僧のひとつであり、万治三年(1660)に僧清印が中興再建し善性寺と号したという『ふるさとの寺と仏像』28頁 茅ヶ崎郷土会 昭和四十七年刊)。この善性寺入り口右側に茅ヶ崎では数少ない文化十四年(1817)銘の出羽三山供養塔がある。基礎を入れて高さ120センチ程である。

(銘文)

右面 文化十有四丁丑年三月日建之

月山

正面 (アーチク) 湯殿山 供養塔

羽黒山

左面 行口 (口は「者」または「人」か?)

青木幸八

基礎には

世八人 松尾村5名、濱之郷村1名の名前と

明治十九年五月十五日

と刻まれている。



この供養塔について近所の方に聞いて見たが最初から現在地にあったものではなく、どこからか移設されたとのこと、また基礎はこの供養塔の基礎として造られたものか、この供養塔と

関係なく、後年、組合わされたものなのか、定かではないとのことであつた。

一方、善性寺のすぐ西隣の神明神社に明治二十二年(1889)銘の厄神大神の石塔がある。その造立年が出羽三山供養塔基礎と近いこと、厄神大神石塔造立の世話人に青木幸七なる銘があり、幸七が出羽三山供養塔を造立した行人青木幸八との親戚関連が考えられることなどから厄神信仰(天明年間に羽黒修験者了善が天明年間に広めた)が契機となつて、明治時代になつて青木幸八の追善供養的な意味合いから基礎を造つたと考えられるものもあながち間違えていない気がする。

造立理由については平塚市千須谷に文化三年(1806)造立の出羽三山供養塔が参考になる。

この平塚の供養塔は文化三年に大千ばつがあり、困り果てた村人は代表者3名を出羽三山に送つた。3名は御神水で濡らした手拭いを山伏の教えに従つて、乾かさないうに村へ持ち帰ると雨が降り始めたという。感謝した村人はこの供養塔を建立し、千ばつが続くと供養塔の前で雨乞い念仏を唱えるようになったと伝承されている(『平塚の石仏』改訂版 4金目地区編 57頁 平塚市博物館 平成十五年刊)。

茅ヶ崎で文化十四年に出羽三山供養塔を造立した行人青木幸八なる人物は同年、同月に「奉書写念佛一万遍無縁法界供養塔」(浜見平共同墓地にある)も施主として造立しており、大山詣では叶えられない事情(大干ばつや疫病流行)のため、出羽三山へ向かい、帰村後、巡拝を記念し出羽三山供養塔や念仏供養塔を造立したのではないかと考えている。この2塔は現在別々の位置にあるが造立時は同じ場所にあったような気がする。しかし、供養塔が造立される前の文化十一年(十三)年頃の記録から災害や疫病流行などを調べてみたが出羽三山登拝に駆り立てそうな理由は発見できなかった。

青木幸八の人間像を考えて見ると、青木幸八は比較的裕福な農民であり、村の修験者的役割を持つ宗教的指導者でなかったかと推察している。

茅ヶ崎で現在確認されている出羽三山信仰に係る石造物は4か所が知られている。①善性寺 出羽三山供養塔(既出) ②西光寺 巡拝塔(寛政十二年・1800) ③玄瑠寺 巡拝塔(元文三年・1738) ④堤 羽黒大神(大正四年・1915)である。

茅ヶ崎の出羽三山信仰関連の石造物は他の石造物と比較して意外に数が少ない。隣の藤沢

市(17基あり)と比較しても茅ヶ崎市は少ないのである。その少なさの理由は現在遺されている三山供養塔、巡拝塔がヒントになるのではないかと考えている。次に西光寺と玄瑠寺の巡拝塔について紹介する。

②西光寺 巡拝塔(智拳印大日如来坐像丸彫を戴く)

西光寺の山門をくぐり、左手墓地内に具像巡拝塔がある。



(竿石の銘文)

右側面 小池太兵衛

月山 秩父三拾四所奉納

正面 湯殿山西國三拾三所四國八拾

羽黒山坂東三拾三所供養

左側面 寛政十二庚申天

三月十三日

とある。『相模の石仏』(松村雄介著 木耳社昭和56年刊)によると、造立者の小池太兵衛や巡拝塔について、「指導者や組織の直接的影響を受けないで長い困難な宗教的実践を果したひとりの農民として貴重な遺品といえる。個人で出羽三山から百ヶ所の観音札所と四国八十八ヶ所の霊場まで踏破した小池太兵衛は強固な信仰心の持ち主であるとともにすでに農民の枠を脱して、いわばセミプロの宗教家、行者のごとき存在でなかったか」(28頁)と記載している。また小池太兵衛一族は観音札所軸を大願主として西光寺へ奉納している『神奈川県姓名家系大辞典』573頁 角川書店平成五年刊)。

③玄瑠寺社寺巡拝塔



玄瑠寺の墓地入り口に右側に智拳印大日如来坐像丸彫を戴く社寺巡拝塔がある

(基礎銘文)

右側面 十一月十日

干時元文三年 仲冬吉日

俗名 願主 権兵衛

正面 深山霊地拝所供養塔

湯殿山大日如来大峰山

伊勢参宮八度大願成就

西国三十三所坂東三十四ヶ所

秩父三十四ヶ所四国八十八ヶ所

その他拝所十二ヶ所の刻字あり

左側面 出羽齒黒山権現 月山、香取、日光

などその他拝所十ヶ所の刻字あり

この巡拝塔(深山霊地拝所供養塔)の造立者もひとりの農民ではないかと思われる。

また巡拝塔に彫られた参拝霊地は全国的な広がりを持つており、巡拝した日程と費用は膨大なものと考えられる。願主権兵衛なる人物もやはり裕福な農民で巡拝後は地元でセミプロ的宗教活動をしたのではないだろうか。

出羽三山信仰について少し長くなるが説明したい。『石仏調査ハンドブック』(雄山閣 平成5年刊)を引用すると、「出羽三山とは月山を主峰とする羽黒山、湯殿山の三山を総称するものである。三山には平安中期に修験道がおこり、三山の信仰が成立した。崇峻天皇の御子、蜂子

皇子の開いたと言われる羽黒山には十界修行の羽黒修験が形成され、湯殿山には空海を開祖と仰ぐ、即身成仏を本願とする湯殿山修験の行場が形成された。鎌倉時代に入ると羽黒修験が強大となり、熊野修験や彦山修験と肩を並べるようになる。しかし室町時代に入ると湯殿山修験が盛んとなつて、江戸時代には出羽三山信仰の中心は大日如来を本地とする湯殿山に移るのである。江戸時代の出羽三山は民間信仰の対象になり、修験者ではない一般の信者の登山が盛んになり、三山講や湯殿講などと称する民間信仰の講集団が出来て、三山登拝が盛んに行われた。室町時代の三山は月山、羽黒山、葉山の三山で、月山の本地は阿弥陀如来、羽黒山の本地は観世音菩薩、葉山の本地は薬師如来であつて三山を修行することによつて過去、現在、未来の三閔をのりこえ、大日如来の浄土である湯殿山に詣で、即身成仏の本懷を達することであつた。のちに政治的な事情から葉山が三山から脱落し、湯殿山を三山に加えることになったのである。」「明治以降の三山供養塔は神仏分離の影響を受けて羽黒山が中央に来て、両側に月山と湯殿山が刻まれるようになる。」「(217～218頁)

また既出の『相模の石仏』によると、「出羽三

山信仰は在地修験者による布教だけでなく、羽黒山から檀那廻りしてくる羽黒修験者によつても盛んになる」(25頁)。江戸時代中期、相模の民衆もそれらの修験者によつて、組織化され、講が結成されて、遠く出羽国まで旅をする三山信仰が定着し始めるようである。

藤沢市にある出羽三山供養塔の多くは講中による造立であるが、茅ヶ崎の出羽三山関連の供養塔(除く堤の羽黒大神)はいずれも個人の造立である。これは在地修験者と羽黒修験者によつて講が結成された藤沢と違い、茅ヶ崎の出羽三山信仰は修験者を中心とした講が結成されず、個人の信仰範囲にとどまつた結果、造塔も少なかったように思われる。房総半島の各地区では現在でも出羽三山信仰が継続されており、三山登拝後、供養塔も建立されているが、江戸時代の茅ヶ崎で出羽三山講が結成されなかった理由は一体何だったのであろうか。

(注) 松尾の文化十四年銘出羽三山供養塔、明治二十二年銘厄神大神石塔、および文化十四年銘無縁法界供養塔は、資料館叢書13『茅ヶ崎の石仏1 鶴嶺地区』(平成二十七年 茅ヶ崎市教育委員会刊)の285頁、269頁、279頁に収録されている。

茅ヶ崎市内の修験道の石仏

源 邦章

修験道とは原始的な山岳信仰を基礎に成立、発展の過程で仏教(特に密教)や道教の入山修行等の影響を受け、中世から近世にかけ日本固有の宗教としての側面を保持し続けました。

そんな修験道と茅ヶ崎とはどう結びつくのかと疑問の方もおられると思いますが、何と近世江戸時代には茅ヶ崎市内には二ヶ寺の修験寺がありました。それは香川の普賢寺(諏訪神社の別当寺)と芹沢の宝沢寺(腰掛神社の別当寺)ですが、二ヶ寺共明治時代初期の修験道廃止令により廃寺となつてしまいました。

山岳修行の場のない茅ヶ崎にも修験道と関係あるものがありません。それは各種の修験道関連の石碑・供養塔で、私はそれを三分類しました。

- (1) 霊山信仰の講中による石碑の建立
- (2) 木食僧侶の指導により結成された講中が建立
- (3) 修験寺僧侶の布教により出来た講中が建立した地神塔

(1) 霊山信仰の講中による石碑の建立(注1)

修験道の聖地・霊山といえは役行者が開いた吉野から熊野への峰入りの道や、役行者の故郷の葛城山でしたが、南北朝時代南朝の朝廷が吉野に置かれたため、大峰山の峰入りが困難な政情となりました。そこで修験者たちは全国各地に峰入り行場を設けました。

そして蜂子皇子の羽黒山、勝道の日光山、立山、白山、戸隠山、富士山、相模大山等の聖地・霊山の行場が開かれて行きました。

茅ヶ崎市内にも各地の霊山の布教者が来て講を作り、その講の信仰の証として作成された石碑が残っています。

- ① 出羽三山碑……赤羽根西光寺、松尾善性寺
- ② 御嶽講碑……小和田熊野神社、菱沼八王子神社、茶屋町稻荷社
- ③ 富士講碑……小和田熊野神社
- ④ 大山講碑……赤羽根西光寺、小和田熊野神社、西久保日吉神社 (日吉神社のものは『茅ヶ崎の石仏1 鶴嶺地区』121頁に収録)

- (2) 木食僧侶の指導により結成された講中が建立(注2)

木食僧侶とは火の入った食物を食べず、木の実や果実のみを食して、肉類・米穀・野菜を常用

しない修行者をいいます。この木食戒で修行する僧侶を木食上人といいます。相模国にも弾誓・但唱・円空・木喰行道・徳本・観正等が布教のため活躍しています。その中で茅ヶ崎には以下の石碑が建立されています。

- ① 木食観正塔……市内では小和田の千手院に一基のみあります。
- ② 徳本名号塔……赤羽根西光寺2基、南湖西運寺、下町屋梅雲寺 (梅雲寺の徳本名号塔は『茅ヶ崎の石仏1 鶴嶺地区』217頁に収録)



- (3) 修験寺僧侶の布教により出来た講中が建立した地神塔(注3)

春分・秋分に最も近いツチノエ(戊)の日に地神を祀る講を「地神講」と呼びます。地神講が建てた地神の像を刻んだ塔、或は文字で地神を示す石塔を「地神塔」といいます。刻像塔は少なく文字塔が多い。天神が天を神格化して「天神」と

呼ぶように、地神とは素朴に大地を神聖視することによって形成された神格で、具体的には仏教の天部である地天(堅牢地神)のような宗教信仰に結びついているようです。

藤沢市の西俣野に神礼寺という当山派修験道の寺院がありました。その布教のツールとして御影(仏像の版画)を使用し、藤沢市周辺で布教したと言われています。神礼寺に繋がるかどうか分かりませんが、市内には文字塔も含め次のようなものがあります。

- ① 赤羽根西光寺…庚申塔・地神像塔、兼務
- ② 高田熊野神社…文字塔、地神塔
- ③ 堤皆楽荘…文字塔、地神塔
- ④ 茅ヶ崎里山公園…文字塔、妙法堅牢地神
- ⑤ 小和田熊野神社…辨財天・堅牢地神、兼務
- ⑥ 菱沼八王子神社…文字塔、賢牢地神塔

(注1)長野「ものがたり修験道史」(『別冊太陽』山の宗教 修験道とは何か)

(注2)木食修行僧を修験とみることについては、松村雄介「茅ヶ崎の石造遺品 そのⅡ―修験と石造遺品(中)」(『郷土ちがさき』第19号 昭和52年)に依った。

(注3)坂井源一「特徴ある石仏の探索」part2―地神講の石塔―レジュメを参考。

藤沢四ツ谷大山鳥居再建

に尽力した教光院了善

金子栄司

このタイトルをみて「オヤツ」と思った方はかなり茅ヶ崎市の石仏通といえる。了善は浜川神社を創立した修験者である。

藤沢市四ツ谷(城南二丁目)、大山道入口に建てられている石鳥居の来歴がわかる古文書がある。高野修著「相模大山講と藤沢」(『藤沢市史研究』19号 1986年藤沢市刊)などにも読下した全文が紹介されている。藤沢市文書館にはそのオリジナルが収蔵されている。くずし字なので読みにくいところもあるが、内容をより正確に理解するのに役立つ。

その古文書「乍恐以書付願上候」から石鳥居建立の来歴を紹介しておく。

万治四年(1661) 正月中に木製鳥居建立
元禄十六年(1703) 大地震の時朽倒。銅鳥居再建を心掛けたが願主達が死亡。そのままに
文政八年(1825) 享保年中(1716〜36)より在々村々、御当地信者達が再建を發意、広く勧進して金子湛足。代官所・地頭所・再建

を出願(江川太郎左衛門手代が再建場所検分実施)

天保八年(1837) 道中奉行所へ石鳥居再建を出願



このような経過を経て天保十一年(1840)大地震朽倒から130年余を費やして再建が実現した。

この書付の末尾には天保八年の再建願が出される前の天保六年(1835)中に代官中村八太夫および江川太郎左衛門役所より鳥居再建にともなう保土ヶ谷宿から茅ヶ崎村間、在々諸所における支障の有無を返答するよう求めた回

状が出されたことにも触れている。

以上が前置きである。

既出の高野論文に収録されている史料「中村八太夫様御回状の写」の冒頭に「武州大井村濱川町羽黒修験教光院可善……石鳥居ヲ再建致度旨相願候……」再建願主として教光院可善の名が出てくる。この文書は何度も目にしているのだが読んでいなかったのだろう。教光院可善の名に気付かなかった。

大井村濱川町という地名に違和感がある。品川区のホームページの地名には出てこない。『品川区史料(13)品川の地名・2000』を調べていないが、この地名表記、大井村濱川町に誤りがあればこの書付は成立しないことになるのであるが、この説明は一先ず先送りしておく。

「教光院可善」の「可善」は「了善」の間違いではないか。了を可と書き間違える可能性はくずし字でも低い。後述するが「中村八太夫様御回状」が出された天保六年(1835)には了善が生存していたからである。

了善は江戸の三大改革の一つ、天保の改革を強行した水野忠邦の腹心甲斐守鳥居耀藏(耀甲斐・妖怪といわれた)の奸計で天保十三年(1842)に島流しにされ嘉永三年(1850)に放

免され江戸に戻ってきている。孫の大野良頭が嘉永五年(1852)に教光院を再興している。

了善が奸計におとしめられる経緯は『水野閣老』によった。

『品川区の文化財』の記述から濱川神社の由緒を略記すると「当社の発祥は江戸期の修験である。天明頃(1781～89)に福島三右衛門が羽黒修験となり、自宅に厄神(やくじん)大権現を祀ったのが始まりとされる。三右衛門はのちに教光院了善と称した。江戸大奥の女中や諸大名から篤い尊信を受けていた。天保十三年(1842)に鳥居耀藏のためにはめられて流罪となったが嘉永三年(1850)放免。嘉永五年(1852)了善の孫大野良頭が再興した。明治維新の神仏分離の際に神社となつて濱川神社を称した。

当社は江戸期には厄神と呼ばれて厄除けの神として尊崇され、信徒は各地に散在し講を結成している。信徒が特に多いのは房総沿岸地域で木更津から佐貫、鴨川にかけての漁村の人々の信仰を得ている。

江戸期の祭日に、これらの人達が舟で東京湾を横断して当社の前に上陸し、その日参籠して祝詞を唱和し、古くは深夜に水行の後『八十八

社の厄神大神』と祈禱する声に東京湾の漁人を驚かすものがあった。参詣の信者は健康を念じ家内安全を願ったという。翌日高尾山に参拝登山したといわれている」。

了善が大山鳥居の再建にかかわった経緯はわからない。茅ヶ崎市内には二基の厄神を祀った石塔が遺されていて、厄神信仰の広がりを知る手掛かりとなっている。これらの信仰集団が了善を大山信仰の鳥居再建の願主に担いだ存在として浮かんでくるが、いかがか。

下町屋の「厄神大権現」は嘉永二年(1849)建立銘。了善が島流しにあつた七年後に建てられたことになる。祭主の御咎めで厄神大権現の祭祀は停止させられていたのであるが、厄神の利益を信じる厄神講の活動は続いていたようだ。嘉永五年(1852)に孫の大野良頭が再興するまでの間厄神大権現はどのようになつていたのでろう。

松尾の「厄神大神」は濱川神社と名前を改めた明治二十二年(1889)の建立。この時期にも厄神講が維持されていたことの証だ。

「中村八太夫様御回状の写」に書かれた「可善」について、濱川神社を管理する天祖諏訪神社から、「了善」の子は「教善」、孫が「良頭」であると

教えていただいた。「可善」の名は関係文書にも見当たらないとのことであった。

付記

品川区大井地区の指定文化財。古文書第13号として平成二十一年七月十四日指定「浜川神社文書51点」がある。

「浜川神社の前身である厄神社(厄神大権現)および浜川神社に関わる江戸時代から近代の文書と証書類で構成され、地域の歴史の解明や神社史を知るうえで貴重」のコメントが大変興味をひく。

品川区文化財の紹介ページにしたがつて文化財の閲覧を申し込んだ。区担当課は文書所蔵は神社と教えてくれた。神社の係に問うと区に保管されていて神社にはないという。日を改めて文書を確認したい。

お知らせ

鶴嶺地区の石仏を網羅した報告書ができました。資料館叢書13『茅ヶ崎の石仏 1 鶴嶺地区』一冊 500円 市文化資料館で頒布中。今後、2茅ヶ崎地区、3松林地区、4小出地区も刊行予定。

本の紹介

猪谷千香著

『つながる図書館 コミュニティの核をめざす試み』(ちくま新書1051 2014年1月 筑摩書房刊)

〈四十四年間を経過した、茅ヶ崎市文化資料館をリニューアルして博物館をつくろうという計画が進んでいます。そのような中で、とても参考になる本が出版されました。二つの紹介記事を書きます。〉

その一

小川正恭

タイトルに引かれて買って棚にあったのですが、昨年の秋頃から何だか気になって面白そうな部分から読み始めました。でも、図書館についての本をなんで博物館に係わるこの場で紹介するのか、と思いませんか。

そこで、まずこの本を書いた著者の思いを少し挙げてみましょう。

・「公共図書館とは赤ちゃんからお年寄りまで利用者の年齢を選ばず、職業や収入も選ばず、無料で使える希有な公的施設である。そして、私たちの人生にチャンスを与え、私たちの暮らす町をより豊かにする可能性を秘めている施設でもあるからだ」(16頁)。

・「図書館にはその土地の歴史と記憶が保存されている。同時に本というメディアを通じた人と人の交流の場であり、人々の心のよりどころでもあるのだ」(325〜6頁)。

このような視点から、全国で注目されている、あるいは、注目すべきと考えられる図書館を取材し、生き生きと伝えようとする、魅力ある内容が詰まった本でした。

確かに読んでわくわくするものの、公共図書館(公立図書館との微妙な違いは本書で確認して下さい)の新たな努力が、報われつつある事例ばかりを取り上げているともつぶやきたくなるかもしれない。でも私は、それ以上に、変わろうとする公共図書館にわかりきった課題・問題を突きつけてひるませるより、うまくいつている要因を知らせ、少なくとも可能性を見出し、読者を元気づけたいという著者の愛情があるからだと思います。この後者の理由で、一度読み始めると「こんなにあちこちでみんな頑張っているんだ」と感じつつ読み進むことができました。

前置きが長くなりましたが、読んでいるうちに、図書館を資料館・博物館に置き換え、「本」を

館に收藏される「暮らしの品々」に置き換えても少しも違和感を覚えないことに気付きました。そうか、いま茅ヶ崎でおこなわれている文化資料館リニューアル(新博物館建設)のためのワークショップに参加して話し合うとき、みんなが求めていることの多くが、全国の各地で、新たな図書館の活動として展開されているではないか、その中には工夫すれば応用可能なアイデアがたくさんあると思いました。

『つながる図書館』は六つの章から成っています。その全体は紹介できませんので、各章ごとに、新博物館建設計画に工夫、あるいは応用可能と思ったことを一つずつ列記してみます。

(1) 複合施設の中への設置

茅ヶ崎では図書館分室との組み合わせができます。新博物館にも司書の資格を持つ事務員がいるのが望ましいですが、博物館の職員に、資格に挑戦してもらってもよいでしょう。館の周りのひろばや川や民家の存在をいかにせば、あるいは、近隣の施設・機関と密接な関係をもてば、館内にとどまらない独自の複合性は発揮できるでしょう。

(2) ワクワクしたくて来る市民に対応できるフレアランス

エントランス周辺の施設と配置は重要です。こ

れに、市内外の関連機関・施設との連携が組み込まれればいっそう効果的に運用できるでしょう。もちろん「まるごと博物館」の活動の拠点が設けられ、その重要な役割をこれまで以上に担ってもらいましょう。そのためには、バックアップする経験者・研究者らのグループ、例えば、現在のアドバイザー会議を引き継ぐ組織や、市民の希望、考えを反映させるワークショップなどが設けられて、館の運営が開かれていることが前提となります。

(3) ビジネス支援する図書館の例

課題解決型の図書館というアイデアは博物館には馴染まないかもしれませんが、しかし、市民の求める知識について、館が作り出す人脈と情報網の中からそれに応じた「知識の引き出し」を提供するセンターとなることはできます。それに加えて、収蔵品を活用してもらい、また、現地に保存されている「文化財・遺産」もの・ひと・こと」に触れ交流することに結びつけ、市民の知る・学ぶ活動を支援するのです。

(4) 神奈川県立図書館問題―施設の重複か？

かつて神奈川県立図書館について、横浜と川崎と二館もあるのは無駄なのでその機能縮小をはかつてはどうかと問題になりました(簡潔に紹介できないのでぜひ本文を読んで下さい)。茅ヶ

崎では埋蔵文化財センターや市史編さん室との連携あるいはそれらが管理する遺物や資料の扱いについての検討が大事な問題だと分かります。連携と、同時に、意味のある違いの説明が求められます。その際に、有識者と市民の声がいかに生かせる仕組みがあるか、どう取り組むか、つまり、博物館の人材と運営がどのような組織として構成されるかが問われます。いわゆるソフト面での設計をきちんと考えねばなりません、丁寧な検討は残念ながらまだないようです。

(5) 「蔦屋」を指定管理者とし、町づくりを担うことを掲げる武雄市図書館と、「すべての市民の知的自由を確保し」ようとする伊万里市民図書館

隣接する二つの市で対照的な運営が行われて、全国からの視察が絶えないそうです。本書の中でも頁数が多い章で、関連する六章も加えれば最大の章です。それだけに問題を短く述べるのは困難です。

茅ヶ崎市民の目からは伊万里市の場合が大いに参考になります。「…現在の市民だけでは無く、今後何世代にも渡って人々の知的活動を支えるべく設計されているはずの組織だ。……あるべき姿とは、長い年月を見通したヴィジョンを

もとに成立するものだろう(143頁)という著者の記述です。現に茅ヶ崎市の新資料館の説明にもこの考え方が導入されようとしていると筆者は感じています。この考え方を生かすために、伊万里市民図書館の場合、とくにレファレンス関連の設備などは素晴らしい工夫と仕掛けが施されていますし、市民活動と結びついたサービスやイベントで賑わっている様子が驚かされます。

初めにも述べましたが、問題点も本書ではきちんと扱ってはいます。とくに、指定管理者制度については五章の最終節で、自治体の目的意識・ガバナンスが問われているとの指摘と共に、この制度の得失が取り上げられています。茅ヶ崎市の新博物館では教育委員会の直営が掲げられています。

(6) つながる公共図書館

文献資料が中心の図書館にとつて、デジタルな手段を活用して外部に発信・公開することや他機関・施設との連携をはかることは手を付けやすいかもしれません。茅ヶ崎の新資料館・博物館なら、収蔵資料の情報化、あるいは、「まるごと」のデータや市内外の他館のデータの活用が基礎になるでしょう。それらの情報が見られる場所は、駅近くのスペースに加えて、市内あちこちに小さな拠点を作るべきです。しかし、データは

見れば終わりではなく、人々のつながりを作り出す基礎になるという大切な役割があります。その役割が果たされるには、データとひとの間を取り持つ仕組みがあれば、つまり、博物館にある収蔵品やモノに触れ、使って見る体験、あるいは、現場で観察できる身体的・感覚的な活動・体験ができることが必要です。新しい館はこのつながり・結びつけの拠点であるという特徴をしつかりと担ってもらいたいと考えます。それには造られる過程でも、動き出してからも、市民の側の取り組み方が大いに影響を及ぼすはずす。

ここまで、本書を読んで思いついたことのほんの一部を述べてきました。アイデアと創意工夫がたつぷりあつて元気づけられます。その内の一つでもいいから新しい資料館で実現されるよう努力しようではありませんか。知りたい学びたい市民が、多様な年齢・性・世代・故郷・文化・国を持つ者たちが、たまたま立ち寄った人が、そこで提供される場所と時間の中で出会い、広い意味での「学習」機能を通じて、ヒト・モノ・コトとの楽しい交わりを体験できるように、そして、私たちと未来の人たちのより良い生き方を考えられるような博物館を作りたいと、私はあらためて思うようになりました。あらたな博物館を求める

者を力づけてくれる応援歌が字間から聞こえてくるような気がして本書をお勧めします。

その二

平野文明

「旬のもの」という言葉がある。『つながる図書館』を読んで、食材のほか、「本」にも旬のものがあることを知った。

市教育委員会は今年、文化資料館を博物館登録した。また近年中に別の場所にリニューアルの計画も進めている。

茅ヶ崎市文化資料館が開館したのは一九七一年(昭和四十六年)七月一日。約半世紀を経ようという博物館施設が、どのような変身を遂げるのかたいへん気になる。という状況の中で読んだこの本は、図書館界の最新の動向を紹介しており、刺激的だった。

当方は博物館施設、本が取り上げるのは図書館の世界、という違いがあるが、多くは三十年ほどの間にリニューアルオープンした図書館について、その準備段階、あるいは開館してからの取り組みを紹介し、新しい風が図書館界を吹いていることを述べる。新風は三か所で吹いているらしい。建設準備段階と、開館後の独自の事業展開と、指定管理者制度を含む図書館運営の三か所に。どれも興味深い事柄だが、ここでは、書

名になつてゐる「つながる図書館」の「つながる」について考えてみる。茅ヶ崎の資料館のリニューアルにも参考になると思われるからである。

何と何が「つながる」というのかは第六章「つながる公共図書館」に書いてある。(「公立図書館」と言っていない所に注目。図書館法では公立図書館という)。

①電子図書館やデジタルアーカイブによつてつながり、外界へと拡張してゆく公共図書館、外界から流れてくる情報を図書館に取り入れてしまおうという取り組み(一八九頁)。

②全国の本棚の図書館化。カフェやワーキングスペース、オフィス。いたるところに本棚はあり、本が置かれている。こうした、町に眠り、一部の人しか使っていない本を手軽に貸し借りできるようにするシステム。「リブライズ」(二二三頁)。

③図書館を居場所にして人と人のつながり。コミュニティ(二一八頁から)。

①と②は情報ネットワークを介したつながり。言い回しが古典的な③は、島根県海士町の事例紹介をとおして、著者が最も力説したかった点だと思われる。書名が『つながる図書館 コミュニティの核をめざす試み』となつてゐるほどだから。

博物館(地域博物館)の世界にこの「つながる」

論を当てはめてみるとどうなるだろうか。まず、情報ネットワークを使つて博物館が外の世界とつながることについては、程度の差はあれ、すでに行われており、取り組んでいない博物館は世間から置いてけ堀を食つてゐる。

「こんな博物館があつたなら好いなあ」的視点から、博物館界の情報ネットワークに乗せてもらいたいコンテンツを一つ挙げるならば、私は、各博物館の蔵書リスト情報を挙げたい。博物館の蔵書は図書館のそれとは違つて、いわゆる専門書が多い。しかも地元の教育委員会などが出した自然、文化に関する報告書が揃つてゐる(はずだ)。趣味で郷土史などをかじつてゐるからか、どこの館園にはどんな報告書があるか、家庭のパソコンで検索できて、尋ねれば見ることができるといふ環境が整えられたらいいなあと思つてゐる。

③は博物館ではどうなるだろうか。よほど珍しい資料か、抜きんで優れた美術品を展示するのなら話は別だが、地域博物館が所蔵し展示している博物館資料の集客力はそんなに強いものではない。図書館がコミュニティの核に成り得るには、それなりの努力と工夫と、その方向に向かつて引つ張る人と、波に乗るチャンスが必要と読み取つたが、博物館にあつても同じことだろ

う。まず図書館と博物館の同異について整理してみる。

図書館は図書を集める。博物館はモノを集める。図書には、整理された情報が文字(文章)として印刷してある。博物館が集めたモノには、すでに調べられ、説明がつくまでに整理されているものもあるが、集められたばかりで、まだ説明が付かないというものもある。拾ひ集められた自然の石ころは、そのままではいつまでたつてもただの石ころだが、調べられて産地が分かり、成分が分かり、名前が付き、何に使えるかなどが分かつてくると、博物館資料に変身する。この変身は「自然の文化化」と言い換えることもできる。

一度調べが済んだものでも、もう一度調べたら、さらに別の情報が引き出せたということもあるから、「調べ」は永遠に終わらない。いろいろとある博物館の仕事の中で、一番重要な仕事は何だと問われるならば、「調べることです。」と私なら答える。二番目に重要な仕事は?と問われるならば、資料を保存すること、そして活用(展示など)することと答えたい。博物館法ではこれを行うのが専門職としての学芸員であると規定している。

図書に詰まつてゐる情報はすでに整理されたものだが、集められたばかりの博物館のモノたち

は、まだ、海のものとも山のものとも分らない段階にある。図書とモノのこの違いは大きい。図書はもともと市民・住民に受け入れられ易い位置にある。一方、博物館(特に地域博物館)資料はもともと集客力が弱く、まして調べられる前の収集品は展示場に出せる段階にはないのである。

図書館が、図書を素材にして人と人を結び、コミュニティの核となる事例をこの本は紹介している。もし、博物館でも同じようなことを目指すなら、独自の工夫が必要だろう。

工夫の一例として、私見を述べてみる。利用者が出入りできるのは展示場までとする館園は多いが、これを拡張して、「集める」・「調べる」・「保存する」・「活用する」という、博物館の仕事の中でも中心となっている仕事を、「博物館の学芸員」と市民・住民が協力して行うということである。市民・住民が「博物館の学芸員」の役目を分担するというスタイルである。これに参加する市民・住民に名前を付けるならば「市民学芸員」と呼びたい。この夢が実現すれば、まず博物館と「市民学芸員」がつながり、次に「市民学芸員」と「市民学芸員」がつながり、「博物館の学芸員」+「市民学芸員」と市民・住民がつながり、最後に博物館を介して市民・住民同士がつながる。ここに博物館

がコミュニティの核になる可能性が生まれる。

樋渡市長の陣頭指揮でカルチュア・コンビニエンスクラブ(TSUTAYA)に指定管理者委託した武雄市図書館は図書館界の話題を一举に奪った。しかし今後は類似の図書館が増えそうだと著者は述べる(一七〇頁)。そのような見通しの中で、他の図書館と差別化をはかり独自性を打ち出すことの必要性和可能性を著者は熱く語る(一六八頁など)。例として挙げるのは「独自のコレクション(図書)」、あるいはその土地の歴史や文化財に関する資料の収集と研究などである。例えば、神奈川県立博物館の専門書のコレクション(一〇七頁)、同じく県立川崎図書館の社史コレクション(一一二頁)、武雄市図書館・歴史資料館の武雄蘭学コレクション(一六五頁)、小布施町立図書館「まちとしよテラソ」の町の歴史や文化財資料のコレクション(一七〇頁)等々である。なんと、これは私たちの博物館世界そのものではないか。図書館の独自路線の向こうに著者が見たものが地域博物館の世界だったとすると、実はそこにも、入館者数がのびない嘆きや、予算と人員の削減の嘆きや、閉館消滅への危機感などが渦を巻いていることを教えてあげたい気がする。

図書館界の新風は、市民・住民の力を尊重し、生かし、その求めを的確にとらえて実現したところから発生したと著者は述べる。図書館界に新しい風が吹き起つたのなら、博物館界でもできないことはなからう。『つながる図書館』は、今の茅ヶ崎にとって「旬の本」なのである。(平成二十七年六月三十日)

「ちがさきの石仏 三〇ある記」と題して、市内の石仏をまず三十例紹介しようと思う。第一回は、その一「芹沢のぎやーぎ婆さん」と、その二「今宿のぎやーぎお婆さん」の二例をとりあげよう。

ぎやーぎ婆さん 咳気神

げいきしん

平野文明

ふしぎな名前だが、「ぎやーぎ婆さん」とか「げーげー婆さん」と呼ばれている女性坐像の石仏が、茅ヶ崎の芹沢と今宿にある。

その一 芹沢の「ぎやーぎ婆さん」

一つは芹沢三三三五、観音堂(下馬落観音、普門寺観音堂、普門寺と紹介されている)の地続きの畑の隅にある。頂部がせり出した光背型の中に、座った姿の女性が半肉彫りで彫刻され

ている。高さは五三センチ、横幅は像の頭のことろで三二センチ、同所の全体の厚み一七センチ、膝張りは三〇センチ、同所の厚み一七センチで、直方体状の基礎石に乗っている。



この石仏には特徴が三つある。最初のそれは彫刻がすばらしいこと。石材は、江戸時代初期の石仏によく見られる、安山岩系の固い石を使っている。肉厚の半肉彫りで量感たっぷり。頭だ

けの厚みが一〇センチもある。着物の襷(ひだ)を表す曲線は柔らかく、多すぎもせず、少なすぎでもない。顔つきは柔和で、たれ目風のまなじりは慈愛に満ちており、この豊かな表情の表現はいのちをも感じさせる。江戸時代の石仏は、形状が形式化しているものが多いが、これにはそれがなく、石造彫刻の優品といえる。

次の特徴は「寛文」の文字が坐像の右側にはつきりと読めること。残念ながらその次の数文字がはつきりしないが、行の最後の文字は「月」のようである。そして、一行分左にずれて「□日」とあるようだが、これも明確ではない。「寛文」の次の数文字を、かつてこの石仏を紹介した故塩原富男さんは「三年(一六六三)」と読んでいる(「ぎやーぎばあさん」のこと「郷土ちがさき」三九号 一九八四年 茅ヶ崎郷土会刊)。また、この塩原さんの文章を下敷きにして執筆したと思われる故松村雄介さんは、『石仏図典』(日本石仏協会編 一九八六年 国書刊行会刊)の「ぎやーぎばあさん」の中で「五年」と読んでいる。この件について私は「三」と読みたい。そして、続く一文字は、両氏がいう「年」のように見えるが、干支であるかもしれない。また、像の左脇には願文があつて然るべきだが、文字があつたようにも見えるがはつきりしない。しかし、寛文(一六六

一・一六七二)銘を持つ石仏は、江戸時代の石仏の中では古い方に属するので、この二文字が明確であることは得難い幸運である。路傍の石仏の出現期のものとして、「ぎやーぎばあさん」は極めて重要な存在である。「寛文」の次にどのような文字があるのか、何としても読みたいものと思う。

最後の特徴は、刻まれている女性のしぐさが特異な点である。女性は、両手で着物の胸元を押し広げ、丸々とした乳房を露わにしている。幼子に母乳を与えようとする母の姿のように見えて、「婆さん」と呼ぶことに気が引ける。この石仏がどのような理由でつくられたのかを問題にする場合、この特異なしぐさが解決の糸口になるものと思う。

地元の伝承では、風邪、あるいはどの病気を治してくれるものと伝えられている。

塩原さんは前記した文中に、この石仏の効能を、『茅ヶ崎市史3 考古民俗編』五七七頁から引用して次のように記している。「ぎやーぎばあさんは風邪というか、のどを患って亡くなられた。わしら小さいときは、風邪のどが痛いとき線香を持っていつてあげた。」(明治四十四年生まれの男性からの聞き書き)。

また、塩原さんが執筆した当時、芹沢に住ん

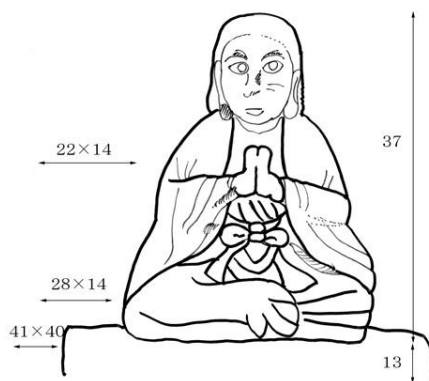
でおられた別の郷土会会員の、「きなこもちをノドにつかえてなくなった…」という話も記録している。

「ぎやーぎ婆さん」は風邪、あるいはのどの病気を治すという霊験があらたかだったようだ。しかし、この霊験は女性像の特異なスタイルに結びついていないと私は思う。風邪系統の病気を治してくれる石仏の女性が、なぜ胸元をはだけなければならぬのか？ 地元で伝承されている霊験とはまた違う別の存在理由があったのではなからうかと考える。

松村さんも自著『相模の石仏』(昭和五十六年 木耳社刊)の第三章「石仏の素材と作者たち」の中にこの像の写真を掲げ(図版 III—17)、同書三二頁に「女性像 茅ヶ崎市芹沢・普門寺 寛文三年(一六六三)／この像がなにをあらわしているのか筆者には説明できないが、(以下略)」と記しているのである。

その二 今宿の「ぎやーぎお婆さん」

不思議な名前の石仏の二つ目は、今宿の路傍の小さな木の祠(ほこら)の中にまつられている。現在ある場所は、国道一号沿いの飲食店の広い駐車場の中のように見える。しかし実は駐車場と仕切られていないが、旧道があつて、その端に



にある。明治の廃仏毀釈で無くなった仏国寺の境内だったと伝えられる場所である。塩原さんは今宿五一七としていたが正しくは四九六の一画らしい。

丸彫りの女性坐像で、大きさは像高三七センチ、胸元で幅二十二センチ、厚さ十四センチ、膝張り二十八センチ、大きなものではない。像容は、

長着に羽織、袴姿で合掌し、髪型はおすべらかし風に長髪を後ろに垂らしている。石の質は柔らかく、文字などはまったくない。類型化している。

平成十一年にこの像を調査、記録している最中に、近くに住むお年寄りから次のように聞いた。『ぎやーぎお婆さん』と呼んで、昔は近所の女の人たちが、風邪をひいたときに治してもらうためにお参りしていた。お願いする時はお茶を一杯供え、治つたお礼参りには手塩皿に梅干を一個のせて供えたので、茶飲み茶碗と小さな皿がたくさんあつて、干からびた梅干も転がっていた。元は、明治時代の初めに廃寺になった仏国寺にあった。』塩原さんも同様の聞き書きを先の文章に記している。この像は『茅ヶ崎の石仏 1 鶴嶺地区』の二二五頁に収録されている。

この二つの姿かたちを比べてみる。芹沢の例は、全体が光背型であること、袴を着けていないラフな格好であること、髪型に特異な点がないこと、胸元をはだけていることから、生活臭が強く感じられ、神、仏というより生身の人体を思わせている。だから神像と言うにはいささか気が引ける。かといって仏像とも言い切れないが、一抹の抹香くさは感じ取ることができる。

これに比べて今宿の例は、髪型、袴を着けて着衣がきちんとしてることから、端正な雰囲気を漂わせており、神に使える巫女のイメージを感じる。神像とはこうあるべきという観念が常識化した時点で作られたものと思う。

今宿のお婆さんが作られたのは、芹沢のお婆さんのずっと後で、江戸時代も後半期になってからと思う。

つぎに、不思議な名前について考えてみる。

芹沢の例は、『小出の石仏』(ピーデ・クルーボ調査執筆 平成九年茅ヶ崎市教育委員会刊)に「ギヤギばあさん、ギヤーギヤーばあさん、セキソンさんなどと呼ばれている。」とある(一一九頁)。今宿では、先のように「ギヤーギお婆さん」と呼ばれていた。これらの呼び方は何に由来するものだろうか。

塩原さんもこのことを問題視していて、『郷土ちがさき』四〇号(昭和一九八四年五月刊)に『「ギヤーギばあさん」のこと その二』を寄せ、方言辞典で「ギヤーけ」「げーき」「がいき」「がいけ」を引き、これは漢字で書けば「咳気」であり、咳風邪(せき)の出る病氣、風邪(かぜ)のこととする事例を紹介している。事例は、新潟、静岡、長野、岐阜、三重、和歌山、京都、兵庫、岡山、鳥取、徳島、高知、愛知、宮崎、福岡、熊本、佐

賀、長崎に渡っている。しかし、神奈川県があらわれていないことについて「なぜか、神奈川県では共通の方言ではないらしい。してみると、なぜ茅ヶ崎にそう呼ばれる石仏が存在するのであるのか。」といぶかしがっている。

余談であるが、松村雄介さんが、『石仏図典』に茅ヶ崎の「ギヤーギばあさん」を執筆した中で「ギヤーギばあさんの石像が分布する地域には、このような方言が存在しないのは興味深い。」としているのは、この塩原さんの文章を受けてのことである。しかし、「ギヤーギ」や「げいき」が「咳気」であり風邪のことだと知らない地域に、風邪を治してくれるギヤーギ婆さんがあっても少しもおかしくはないと私は思う。名前はどうかであろうと、願いをかなえてもらえるのなら十分ありがたいのだから。

「咳気神(げいきしん)」をインターネットで調べてみると、三島市のホームページに「風邪から守る婆様の力」ギヤーギバアサン」が写真入りで紹介されていた。隣接する裾野市と清水町にもあるようである。内容は茅ヶ崎の例によく似ている。

『小出の石仏』に「セキソンさん」とも呼ばれるとあるが、これは「咳」を仲立ちにして大山の「石

尊様」とその呼び方が混同したためと考えられる。

以上述べてきたことから、「ギヤーギ」「げいき」、これに類する呼び方は風邪の異名の「咳気」に基づくものであり、この治療に効能があるとされる神霊は女性像であることが多いことが分かった。しかし、まだ問題は解決しない。風邪の病なおしに霊能のある神霊が、なぜ女性像なのだろうか。その上に胸をはだけているものもある。これはまた、何のための所作なのだろうか。さらに、女性像でない石をそう呼んだり、似た形の女性像であつてもそう呼ばない例もある。次回もこの話を続けてみようと思う。

(平成二十七年七月)

〈編集後記〉

今回は、修験道が関係した文章が三題集まりました。修験は江戸時代には、庶民の生活に深く関与していたが、市内にはその実態を伝える資料は少ない。さらに調査・研究が進むことが望まれます。

※不明の点等は一頁に記載の連絡先までにどうぞ。なお、本誌バックナンバーは茅ヶ崎文化資料館のホームページで公開しております。

(<http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kankou/8137/010670.html>)